韓国人と星、そして韓流ドラマ
－東日本大震災と「満天の星」を手掛かりとして－

丁　貴連・樫宿　英子[1]

はじめに－なぜ「星」なのか

2011年3月11日午後2時46分、阪神・淡路大震災(1995)を超えるマグニチュード9.0の巨大地震が、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、栃木、群馬で発生し、高さ10mの津波が、東北や関東沿岸に押し寄せた。これが、「東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)」で、日本の近現代史を揺るがす大震災となった。人的被害は、阪神・淡路大震災を上回り、死者1万9689名、行方不明者2563名という、尊い命が津波で沖に流され亡くなった。負傷者は、6233名[2]であった。また、115万3043棟の住宅が、全半壊や一部損壊[3]をしている。世界最大級の地震と津波、そして原発事故は、家族や大切なものすべて奪い、日常の暮らしを一瞬にして変えた。

このような悲惨な状況の中、失意のどん底にいた人たちを元気づけたのが、「満天の星」であった。下を向き不安しか感じられなかったが、震災の11日の夜は、上を向いて満天の星を見た人が多かった。仙台市の阿部美奈子さんもその一人で、次のように話す。

（前略）寒空の下で凍えながら、外の簡易トイレの列に並んだ目には、暗い地面しか映らなかった。ところが、同じようにトイレに行った11歳の息子が、満面の笑みを浮かべて戻って来た。「星がね、すごいんだよ。お母さんも一緒に見よう」何で今さら星なんて、と言う私を残して息子は「星空散歩」と言いながらまた外へ。それならと、2回目トイレに行った時、思い切って重い頭を上に向けてみた。するとそこに広がっていたのは、電気の消えた漆黒の仙台の夜景から、こぼれ落ちてきそうな星、星、星。見たこともない美しい星空に、ためていた涙が一気に溢れ出した。仙台はこんなに星が見える街だったんだ。子供はこんな時でも、それに気づく事が出来るんだ。（中略）同時に、こんな悲惨な状況でも、美しいものや楽しいものを見つけられるすてきな子どもたちを何としても守っていかねばと、弱気になっていた心に活を入れられた忘れられない夜だった[4]。（下線は筆者、以下同じ）

また、母親の行方を捜していた女性は、次のように話している。

千年に一度の天変地異に突き落とされた私たち。それでもなお、そこから立ち上がるんだと、天の星々はあふれる光りで私を奮い立たせてくれました[5]。

そして、菊池里帆子さんは、作文に次のよう書いている。

私たち姉弟は、家族のことを考えながら空をみていました。私達の不安な気持ちとは裏腹に、あの日の星は恐ろしいほど光って、私達をはげまし続けてくれました。（中略）大きな大きな希望の光となり、照らしてくれていたのです[6]。

いつもは気にしていない星だが、避難できた人や津波や倒壊で死と隣り合せになった人たちは、あの夜、満天の星空を見て「悲しむより、何とかこの震災を乗り越え生きていこう」と元気づけられていた。あの夜に満天の星が現れたことは、自分も含めて、我々に、生き方を示してくれたように考えられる。

東日本大震災は、我々の生活にいろいろ影響を及ぼし、9年経った今でも原発問題や震災復興の問題ばかりが論じられている。それは、とても大事なことであるが、満天の星があの夜に現れて、被災した人たちはもちろんのこと、そうでない人にも深い印象を与えたことをエピソードから受けとり、これが、日本人の星観、日本人特有の精神世界なのだと改めて感じさせられた。

いったいなぜ筆者はそのように感じたのか。振り

返って考えてみた時、震災が起こる前の2003年頃から筆者は韓流ドラマをよく観ていたが、その中には星が出てくるドラマが少なくなかった。しかもそれらは、東日本大震災の夜、被災した人たちが見て心動かされた満天の星や流れ星とは違うものであった。

たとえば、韓流ブームを巻き起こした『冬のソナタ』（2002、KBS）には、はるか遠くで季節が変わっても動かず、闇の中で迷った時、人生の方向を照らしてくれる存在として北極星(ポラリス)が描かれている。「冬のソナタ」だけではない。「インビテーション」（1999、KBS）、「あなたは星」（2004-2005、KBS）、「シティー・ホール」（2009、SBS）、「サメ - 愛の黙示録」（2013、KBS）など、多くの韓流ドラマには北極星がよく登場するだけではなく、いずれも人生の方向を導いてくれる「道しるべの星」として描かれているのである。この違いは何なのか。

そこで本稿では、東日本大震災の満天の星と流れ星、そして韓流ドラマを手掛かりに、日本人の星観と韓国人の星観を比較しながら、韓国人がなぜ北極星を好みドラマで描くのか、その歴史的文化的背景を明らかにする。

Ⅰ『冬のソナタ』の衝撃ー北極星（ポラリス）

前節で触れたように、日本人は数ある星の中でも満天の星や流れ星といった名もない星に魂を揺さぶられ、生きる希望を見いだそうとしていた。特に流れ星は、亡くなった人の魂と直結して捉えている。それに対して韓国人は、流れ星をどのように捉えているか。それがはっきり表れているのが、以下の韓流ドラマである。『兄嫁は19歳』（2004、SBS）、『大祚榮』（2006-2007、KBS）、『トンイ』（2010、MBC）、『夜叉』（2010、OCN）、『オレのこと好きでしょ』（2011、MBC）などである。これらのドラマで描かれる流れ星は、ふたつに分けられる。ひとつは、願い事をする星、もうひとつは、吉凶を表わす星として登場する。また、『星から来たあなた』（2013、SBS）では、流れ星をただの石と言い切っている。ある日、ソウルの夜空に流星群が現れた。ソンイは流れ星に、願い事をしようとするが、恋人のミンジュンは、次のように言う。

ソンイ：
願い事する？

ミンジュン：
ただの石だ、地球に来て一番あきれたのは、流星に願うことだ[7]。

（『星から来たあなた』第21話）

流れ星に願い事をするのは、両国とも同じであるにもかかわらず、星観が異なる。筆者が違和感を覚えるのは、流れ星だけでない。北極星や北斗七星でも同じである。たとえば『冬のソナタ』に出てくる北極星である。現代社会は、時間や仕事に追われ心のゆとりがなくなり、また、街の灯り等で星が見えにくい環境にある。日本人も例外でない。いつの頃からかあまり星のことを気にしないで暮らすようになっていた。そんな日本人に、北極星の存在を強く印象付けたのが『冬のソナタ』である。ドラマに描かれる北極星は、日本人が流れ星を見て心の琴線に触れるように、韓国人にとって特別な星であることが分かる。では、ドラマに描かれる北極星は、何なのか見ていく。

『冬のソナタ』（原題『冬の恋歌』）は、高校時代に出会った主人公チュンサンとヒロインのユジンが、さまざまな障害を乗り越えて初恋の相手と純愛を貫く物語である。描かれた初恋は、ドラマを受容する中高年層の女性たちの琴線に触れ、支持され、日本列島に韓流ブーム現象を巻き起こした。

日本では、2003年、NHK（衛星放送第2）が夜10時台で放映したのが最初で、三度目の放送（地上波）では、高視聴率20.6%を記録した[8]。爆発的な人気によって、たちまち初恋、純愛、ロマンチックなせりふ、美しい映像、音楽などに注目が集まった。その中でも「初恋」や「純愛」は、マスコミでも取り上げられ話題になり評価された。

しかし一方で、視聴者の中には、純愛や初恋とは別な見方をしている女性たちが多くいた。世代を越えて、主人公やヒロインの言葉に、悲しみが癒やされたり、人生を前向きに生きようとするきっかけになるなど、さまざまな女性たちが励まされた。その言葉を挙げてみると、以下になる。これは、視聴者が選んだ「名セリフベスト10[9]」の中の1位と2位である。

私、ミニョンさんには、ごめんなさいなんて言いませんから。ミニョンさんは私の一番大切なものを持っていったから。私の心を持っていったから。私、あなたには謝りません。愛しています。

（1位、第10話）

他の星がみんな動いても、ポラリスは同じところにあるでしょう。（中略）でも、僕が同じ場所で待っていたら、道に迷わないよね。
（2位、第10話）

実際に、このようなせりふに励まされた人たちは、次のように語っている。それが、以下である。

「冬のソナタ」は強力な私の心の栄養剤です。この栄養剤で介護の生活を頑張っていきたい（以下略）。（兵庫県、女性[10]）

今まで仕事と子育てに追われ、つまらない生活だったのが一転、張り合いも出来ましたし、幸せを感じるんです。（東京都、女性、41歳[11]）

このほかにも、負った傷をこのドラマが癒やしてくれたと訴える人もいた。それが、以下である。

出産時の医療事故により子どもを亡くし、自分自身も不調を抱えるようになってしまった。何を見ても心躍ることはなく、重く暗い日々が長年続いていた。そんな私が『冬のソナタ』に出逢ったことで、なかなか抜け出られないトンネルのような長い生活から、一気に光りを見たような自分を取り戻すことができました。今は、『冬のソナタ』のビデオかCDを一日中掛けています。これもリハビリの一つだったのかもしれないと思いました。（以下略）（女性、54歳[12]）

世代によって、また環境によって、言葉の受け取り方は違うが、純粋な愛の物語を超えて精神論的に見ている人たちが多くいた。

ドラマの放送後は、ストーリーとともに「ポラリス」は話題となり、日本人にポラリスが「北極星」の英語名であることを広く知らしめ、忘れていた夜空に瞬く星を思い出させてくれた。

このように、『冬のソナタ』で描かれた「ポラリス」は、日本人に大きな衝撃と影響を与えた。では、『冬のソナタ』とはどのようなものなのか。

物語は高校時代から始まる。登校途中のヒロインのユジンは、転校生のチュンサンとバスの中で偶然出会う。二人はひとり親家庭という共通点もあり、やがて惹かれ合い、初恋の思い出を紡いでいたが、突然チュンサンは交通事故で死んでしまう。ところが10年後、ユジンが婚約式を控えた夜、目の前にチュンサン似のミニョンが現われる。実は、チュンサンとミニョンは同一人物で、高校生以前の記憶を失っていた。やがて、真実を知った二人は、親の初恋に振り回されるなど、幾つもの障害を乗り越え初恋を実らせる。

ポラリスは、ネックレスやシール、会社名など、形を変えてドラマに出てくるが、ここで筆者が注目するのが、高校生のチュンサンがユジンにポラリスを教える場面と、ユジンが大人になってミニョンにポラリスの話をする場面である。二回出で来るポラリス描写に、どんな意味があるのだろうか。

一回目は、冬のある日、放送クラブの合宿に行ったチュンサンとユジンは口喧嘩する。腹を立てたユジンは、キャンプ場の裏山に入ってしまうが、道に迷い暗闇の中で助けを待っていた。やがて探しにやって来たチュンサンに発見され麓の山小屋まで降りて行くが、途中の尾根でチュンサンは、ユジンの不安を和らげようと夜空を見上げ、ポラリスの話をする。その時の会話が、以下である。

チュンサン：
あそこにWの形をした星、見える？
ユジン：
カシオペア？
チュンサン：
そう。その隣にポラリスが見える？
ユジン：
ポラリス？
チュンサン：
北極星のことだよ。あの北斗七星とカシオペアの間の大きな星だけど、見える？これから山の中で道に迷ったら、真っ先にポラリスを探してごらん。それから両手をこうやって広げて羅針盤に見立てるんだ。さっき山小屋はカシオペアの方角にあったんだよ。だけど今は…。
ユジン：
北斗七星の方が、もっとよく見えるね。
チュンサン：

うん。だからあっちの方へ下りていけば、山小屋はあるだろう。

ユジン：

でも、星座は季節によって変わるんじゃないの？

チュンサン：

いや、ポラリスは絶対に位置が移動しないんだ。だから、どこにいてもすぐに見つけられるだろう。これから、道に迷ったらまっ先にポラリスを探してごらん。いつもその場所にいるはずだから。

（『冬のソナタ』第2話）

【図1】ポラリスの話を聞くユジン（左）[13]

ユジンは、カシオペアを知っていたが、ポラリスはチュンサンに教えてもらうまでその存在を分からず、気にもしなかった。まさにこの時初めて、ポラリスの真の意味を知ったのである。

二回目は、初恋のチュンサンは亡くなり、ユジンはポラリスを失ったが、彼が話してくれた「迷った時はポラリスを探してごらん。ポラリスは絶対動かなんだよ」は、ユジンの特別な言葉として心に深く刻み込まれる。そして、この言葉をかみしめ、我が道を歩いて行こうと考えた。そこで、絵が好きだったユジンは、チュンサンが言っていたように、自分の生きる道を選び、進んでたどり着いたのが、インテリアデザイナーであった。自分の道を信じてきた彼女は、社会に出てから会社「ポラリス」を立ち上げる。そこで会社の共同経営者という立場から、選んだ道を生きていくという気持ちと、純粋に愛した人チュンサンをいつまでも忘れないという思いから、会社名をポラリスと付けたのだ。このように、ユジンはポラリスのイメージを秘めて10年生きてきた。

そんな彼女の前に、チュンサン似のミニョンが目の前に現れ心が揺れる。彼は設計事務所「マルシアン」の理事イ・ミニョンといい、スキー場の改装工事でユジンの「ポラリス」と共同作業をすることになる。ユジンは幼馴染みのサンヒョクと婚約していたが、必然的にチュンサン似のミニョンに惹かれる。サンヒョクは、婚約発表をするため家族や友人を会場に招くが、ユジンは結婚できないと言ってその場から逃げ出す。それを見たミニョンは、ユジンの手を引っ張って車に乗せ自分の別荘へ連れて行く。そこで、ユジンは、星空を見ながらミニヨンに、ポラリスの話をする。その時の会話が、以下である。

ユジン：

ポラリスって知ってます？ポラリス？

ミニョン：

知ってますよ。ポラリス。

ユジン：

昔チュンサンが教えてくれたんです。山の中で道に迷ったら、ポラリスを探せばいいって。季節が変わると他の星は位置が変わるけれど、ポラリスは絶対動かないんです。いつも同じ場所にあるから…。

ミニョン：

ユジンさん、道に迷っているような気がするんですか？

ユジン：

わたしは今日、大切な人を傷つけてしまいました。お母さん、ヨングク、ジンスク、サンヒョク、もしかしたら、私、二度と許してもらえないかもしれません。どうしょう？

ミニョン：

他の星がみんな動いてもポラリスはいつも同じ場所にあるって言いましたよね？　もし、他の人がユジンさんのこと許せないって、理解できないって、そう言って去ったとしても、僕がいつも同じ場所にいてあげれば、道に迷うことありませんよね。

（『冬のソナタ』第10話）

ユジンはミニョンと出会うまで、ポラリスを見て心が揺れ動くことはなかった。しかし、婚約式に向かう途中でポラリスを見つけ、ミニョンにめぐり会ってから、ユジンの気持ちは揺れ続けている。婚約者のサンヒョクを裏切ったことで申し訳なく思い、死んでこの世にいないが、初恋のチュンサンにも申し訳ないと

思う。また、信頼してくれていた家族や友人までも悲しませてしまったことを承知しながらも、ユジンはどうしてもミニョンに惹かれていく。この状況で、ユジンがミニョンに問いかけた「ポラリスを知っていますか、ポラリス」は、迷っている自分をミニョンに強く引っ張って欲しいという気持ちの表れである。ユジンはかつて、放送部の仲間たちとキャンプに行った時、迷っている自分を探し出し、山小屋へと手を引いて導いてくれた、あの時のチュンサンとミニョンが重なる。チュンサンと一緒にポラリスを見た時、ユジンの心には何の迷いもなかった。サンヒョクはただの幼なじみで、特別な感情を抱いていなかったからである。尾根道から北の方角を指して見たポラリスは、あくまでも山小屋に戻るための道しるべであったのだ。

ミニョンは、ユジンからポラリスの話を聞き、彼女の気持ちを察して「ユジンさん、道に迷っているような気がするんですか?」と尋ねたうえで、彼女の気持ちに応えるために「僕がいつも同じ場所にいてあげれば、道に迷うことありませんよね」と言って、迷っているユジンにミニョンは進むべき方向性を示す言葉を返す。ミニョンがポラリスとなって、迷っているユジンを強く導くのである。

これらの星描写から、韓国人は季節が変わっても動かないポラリスに、精神的に引っ張って欲しいという強い思いがあることが分かる。

このように、「ポラリス(北極星)」に視点をおいて『冬のソナタ』を観てみると、別な韓国社会や韓国人の精神世界が見えてくる。当時、「ポラリス」は話題になったものの、そこに注目して論じられるものは殆どなかった。筆者がこのテーマに注目する所以なのである。

Ⅱ　日本人が心寄せる「星」

「はじめに」で述べたように、日本人は満天の星のような名もない小さな星や流れ星にシンパシーを感じるが、韓国人は『冬のソナタ』に描かれた、北の夜空でいつも同じ場所で輝いている名前のある強い星が好きである。このように、日本人と韓国人の星観は全く違う。

日本では、文学の世界にも満天の星や流れ星が出てくる作品がある。太宰治の『走れメロス[14]』(1940)には「満天の星」、藤原ていの『流れる星は生きている[15]』(1984)には、「流れ星」が出てくる。しかし、星が出てくる作品を探すのは難しい。では、テレビドラマには、どのような星が出てくるのだろうか。次の節で見ていく。

1　日本のテレビドラマで描かれる「星」

星の描写と星のあるせりふが出てくる日本ドラマは、意外に少ない。その中にあって『空から降る一億の星』(2002、フジテレビ)、『流星の絆』(2008、TBS)、『熱血シングル・ファザー新聞記者・新庄圭吾の事件ファイル3』(2016年、BSフジ)、時代劇ドラマ『鬼平犯科帳シリーズ』(1969～2016、テレビ朝日、フジテレビ)などがある。『空から降る一億の星』には、「満天の星」とせりふがある。それが、以下である。

堂島刑事:

見てみ、琴ちゃん。こんな時に、こんな夜に、空から降る星はきれいやな[16]。

(『空から降る一億の星』最終話)

この場面は、独身の堂島が結婚もせず、実の妹として幼い頃から育ててきた優子が自死した。その夜、空には満天の星がきれいに輝いていた。それを見た堂島は、生き別れた実の兄妹が死んでしまったが、兄妹は星となって夜の空で再会し嬉しそうに輝いていると想像できた。悔しさと辛さを抑えた堂島は、同僚の女刑事に語りかけた言葉がそれであった。

『流星の絆』には、「流れ星」「しし座流星群」が出てくる。小学生の時、両親を殺された兄妹の三人が、大人になって犯人を捕まえる話である。三人そろって流れ星を見たかったが、なかなか叶えられなかった。だが、自分たちの手で真犯人を突き止めた時に、しし座流星群が夜空に現れ、その嬉しさを長男の有明功一が「ずっと願っていたのに、叶わなかったことがさ、こんな時になんてさ」(最終話)と言うのである。

『鬼平犯科帳－流星[17]』は、サブタイトルにあるように「流れ星」が出てくる。だが、その描写は一瞬で星のせりふはない。流れ星は、江戸を脅かした盗賊を火付盗賊改の長谷川平蔵らが捕らえた後、彼がラストシーンで流星を見る。

最後の『熱血シングル・ファザー新聞記者・新庄圭吾の事件ファイル3』は、日本のドラマでは珍しく、星のせりふがしっかりと描かれている。シングル・ファザーの新聞記者、新庄圭吾は、一人で小学生と幼稚

園の息子を育てながら仕事をしている。ドラマは、子育てをとおして、親としてまた人間として成長していく物語である。星描写は、母親が死んでいない息子の友だちを満天の星で新庄圭吾が励ます場面である。それが、以下である。

新庄暖：
　お父さんすごいね。お星さまいっぱいだよ。
ジュン：
　いっぱいすぎて、お母さんの星がどれだかわかんないよ。
新庄暖：
　お母さん？
ジュン：
　お母さん、星になったんだよ。人は死ぬと、星に生まれかわるんだって。
新庄圭吾：
　ジュン君、お母さんの星はさ。きっと、じゅん君が見て一番きれいだと思う星なんじゃないかな。
新庄暖：
　ほんとうに、きれいだね。
新庄圭吾：
　なぁ、みんな。星はどうやって生まれるか知ってるか？
じゅん：
　知らない。どうやって？　お母さん、どうやって星に生まれ変わったの？
新庄圭吾：
　星はね。星雲っていうところから生まれるんだ。じゅん君のお母さんの魂は、きっとその星雲というところに飛んで行ったんだよね。
じゅん：
　せいうん？
新庄圭吾：
　漢字で星の雲と書くの。あそこは、お母さんのお腹の中にいるみたいだよね。星の卵たちをいっぱい抱えて、その星雲の中で育った星たちがキラッ、キラッのお星さまになって、宇宙に飛んで行くんだ。何十億年も輝き続けるんだよ。
じゅん：
　すごい。
新庄圭吾：
　すごいだろう。星雲から飛び出した星たちが、こうやって一生光っている星を見てると、何だか、こっちまできれいな気持ちになりますよね。心が洗われて、また明日から頑張ろうって、そういう思いにさせてくれるんです[18]。

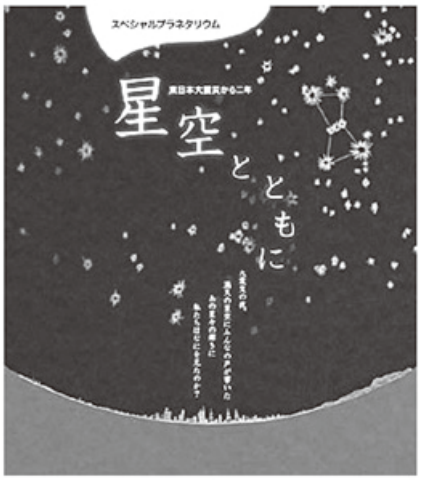
日本のテレビドラマで描かれる星も、このように「満天の星」や「流れ星」で、星は人の心情を映している。では、なぜ日本人は、名もない小さな星や現れてはすぐに消え去る流れ星が好きなのだろうか。その背景を探る手掛かりとなるのが、東日本大震災の満天の星である。被災者たちは、震災の夜見た星から何を感じ、何を思ったのか、それを見ていく。

2　東日本大震災と「満天の星」

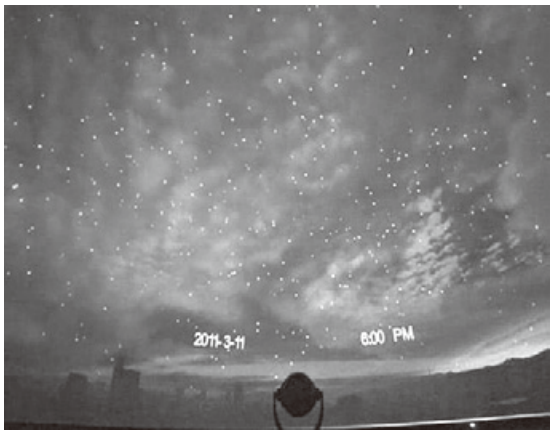
被災地のひとつ仙台では、見慣れた景色が一変し、地上は見たことも経験したこともない悲惨な状況になっていた。その日は、雪が舞っていた。そんな中、余震の恐怖と寒さにひたすら耐えながら、被災した人たちは日暮れを迎えた。やがて夜が更けると、雪がやみ、夜空には、これまで見たこともないほどの、美しい満天の星空が現われて、大人も子どもみな驚いた。震災時、明かりの消えた街に、ふだんは見られない美しい星空が現われたことは、当時大きな話題を呼んでいた[19]。

宮城県仙台市天文台では、「あの日、多くの人々が星空を見上げて、さまざま想いを馳せていたことを知り、その日の星空とともに、人々の想いを伝え残していこう」と、震災のあの日の星空を再現するプログラムを2012年に制作した。

プログラム内容は、震災の被害を受けた街の映像



【図2】「星空とともに」ポスター（仙台市天文台[20]）



【図 3】再現された満天の星 [21]

を映すのではなく、当日の満天の星空を再現したプラネタリウムの投映と、震災と星のエピソードを紹介するものである。

再現の夜空は、地震発生の午後 2 時 46 分から日没を経て、翌朝の日の出までである。このプログラムは、「星空とともに」と題し、2012 年 3 月にはじめて仙台市天文台で投映が行なわれた。被災者の心情がちりばめられたプログラムは反響を呼び、2014 年から被災日に合わせ全国のプラネタリウム施設でも投映し、称賛を集め、あの日の夜の出来事を伝えている。

【図 4】「星空とともに」をみる人たち (NHK[22])

3月11日の星空を再現

プラネタリウム、各地で

東日本大震災が発生した2011年3月11日の夜から翌朝までの星空を再現した、仙台市天文台制作のプラネタリウム番組「星空とともに」が好評だ。毎年3月11日に合わせて上映してきたが、震災5年となる今年は期間を拡大。北海道から福岡までの15都道府県でも上映が予定され「もう一度あの日を受け止めて」と呼び掛けている。

「あの夜は、驚くほど流れ星が飛びました。流れ星は天国へ向かう魂なのだというエピソードが頭をよぎり、その多さに耐えられなくなりました」。映し出された星空に、アナウンスが重なる。内容は地元紙への投書やブログから引用した、被災者たちの言葉だ。

地震と津波の影響で大停電となった3月11日夜、被災地を包み込んだ星空を再現したいと仙台市天文台が12年に企画。日本プラネタリウム協議会の全国大会で発表したところ反響が大きく、各地で上映されるようになった。

脚本を手掛けた仙台市天文台の大江宏典さん(42)は「あの日、東北で何が起きたかを知り、被災地に思いを寄せるきっかけにしてほしい」と話している。

上映時間は約40分。各地の上映場所や日程は、仙台市天文台のホームページで確認できる。同天文台でも3月26日までの毎週土曜と、3月7、8、10、11日に上映。問同天文台022・391・1300。

【図 5】プラネタリウム番組の紹介記事 (『下野新聞』2016 年 2 月 28 日付け [23])

人々の共感を呼んだ「星空とともに」は、栃木県でも地元紙の『下野新聞』が「3 月 11 日の星空を再現」と題し、仙台市天文台制作のプラネタリウム番組を紹介する記事を載せ、県民に広く知らせている。

震災から 9 年が経過した 2020 年現在もなお、5 万 1778 名 [24] もの人たちが、国内各地で避難生活を強いられている。実は、このプラネタリウム番組は各地で避難生活をしている人たちを元気づけていた。

震災から 4 年後、仙台で被災した阿部輝さん（中学 3 年生）は、京都で避難生活を送っているが、「あの日の星空をもう一度見て、元気づけられた。力になる [25]」とプラネタリウムでよみがえったあの日の星空を見てそう話す。プラネタリウムで映し出した「あの日の星空」は、震災から 4 年の歳月が経っても、阿部輝さんのような、震災を体験した人たちの心に語りかけている。そういう意味において、被災地の星空を再現したプラネタリウムの上映は意義深い。【図 5】の『下野新聞』は、その反響がいかに大きいかを如実に物語っている。

プラネタリウムの上映では、地元紙の「ティータイム」などに寄せられた一般市民の投稿文や、ブログから引用した、被災した人たちの言葉が朗読された。その一部が以下である。

家族の迎えがないまま、真暗な学校に残った子どもたちと夜空を見上げた。流れ星が驚くほど飛んだ。流れ星は天国へ向かう魂だというエピソードが頭をよぎり、その多さに耐えられなくなり目を伏せてしまった。（夫を津波で亡くした、多賀城市の小学校の女性教員 [26]）

初めてこんなにたくさんの流れ星を見た。流れ星は死んだ人の魂なんだよ、という話を思い出して少し怖くなった [27]。

無数の星が見え、恐ろしかったが、美しかった [28]。

死んだら星になると言われるのを思いだした [29]。

流れ星は人が亡くなったときに現れるという。あの日は流れ星がたくさん見られ明るく照らす道しる

べ[30]。

輝く星は、亡くなった人が迷わないように明るく照らす道しるべ[31]。

などが、紹介された。

その後も、仙台市の河北新報社には、災害と星に関する投稿が寄せられ、初めて体験した大震災への驚きや被災者への思いを俳句や短歌に詠んでいる中学生や高校生もいた。それが、以下である。

＜中学生の俳句＞
星の数　みんなの思い　光っている
宮城県女川中学１年　美紅

（津波は浜辺の自宅を沖へ流した。（中略）明かりを失った町は夜、暗闇に包まれる。空のほうが明るいかな。これまで気にも留めなかった夜空を見上げた。無数の星。震災地を支援し続けてくれた日本中の人々、世界中の人々の数に重なった[32]）

＜高校生の短歌＞
あの時は　予測もできぬ　暗やみで
いつもは見ない　星を見上げる
宮城県大崎市高校１年、秋生美幸

（中学校の卒業を祝う会で、公民館にいた時に、震度６強の揺れに遭った。停電の中、ラジオが大勢の人が亡くなっていることを伝え、びっくりした。あの日の夜、自宅から見た夜空はとてもきれいだった[33]）

震災から６年経った2017年、震災時小学校６年生だった菊池里帆さんは、3月11日を振り返って、「星」のエピソードを次のように語っている。

死、たくさんの死。「おねえちゃん、星」体調を崩して横になっていた弟が、ふいに言った。窓の外を見る。雪はやんでいた。信じられないくらいの星の数。全部が１等星に見えた。人は亡くなるとお星さまになる。その話を思い出した。星がわたしたちを照らしてくれる[34]。

再現プログラムを企画した仙台市天文台の大江宏典は、感じ方はそれぞれだが、捉え方は違っても、星空があの震災の一つの『象徴』になっているのだと感じた[35]と語っている。

このように、震災があった3月11日夜の星空を見て、被災者たちがシンパシーを感じたのは名もない「満天の星」と「流れ星」なのであった。

前述したように、日本では少ないが名もない星や流れ星などが、文学作品やドラマなどに取り上げられている。その背景を考えると、星観の違いの根底には、日本と韓国の美意識が関係するのではないだろうか。

日本人は、仏教の影響を受け今日まで暮らして来ている。その仏教の中核教義の一つに、無常というものがある。それは、生滅変化して移り変わり、しばらくも同じ状態に留まらない[36]という教えである。日本人は、それを肯定的に理解し、無常だからこそ、一瞬一瞬が貴重であり、変化していく様に美を見出そうとした。だから、春の「花見」、夏の「花火」といったように「散るもの」に「はかなさ」を感じる。満月も古くから好まれているが「三日月」のように月が欠け変化していく様を風情があると日本人は感じる。さらに、星は一瞬に過ぎていく「流れ星」や「彗星」が日本人は好きである。これらに共通することは、ひとつのものが一カ所に長く留まっているものでなく、消え去っていく、変化する有り様、そこに「もののあはれ」として美意識を日本人はもつ。だから、日本人は小さな星や流れ星のような星にシンパシーを感じるのだ。また、満天の星や流れ星は、東日本大震災で被災した人たちが、それらの星を手がかりに、何とか生き延びようとした姿から、健気さや、まじめな日本人の生き方を浮き彫りにした。

Ⅲ　韓流ドラマで愛される「北極星」と「北斗七星」

前節の『冬のソナタ』に描かれたように、韓流ドラマでは強い星がよく取り上げられている。その中でも多く描かれているのが「北極星」と「北斗七星」である。特に、「北極星（ポラリス）」に対する思いや美意識は強い。韓国人においては、花見や花火を見てきれいと思うが、日本人が感じるはかなさ、もののあはれを感じる人はいない。月においては満月に韓国人は憧れを抱く。星にあっては、「流れ星」や「彗星」のように一瞬にして消えて見えなくなる星より、はるか遠くにあっても北極星(ポラリス)のように、季節が変わっ

ても動かず、闇の中で迷った時、人生の方向を照らしてくれる星が好きである。そのせいもあろうが、韓国では強いもの、頼れるもの、不動の存在としての星を歌いあげた詩が多い。なかでも、長く韓国人に愛されている詩が、尹東柱の「序詩」（1941）である。それが以下である。

「序　詩」（1941.11.20）
死ぬ日まで空を仰ぎ
一点の恥辱（はじ）なきことを、
葉あいにそよぐ風にも
私は心痛んだ。
星をうたう心で
生きとし生けるものをいとおしまねば
そしてわたしに与えられた道を
歩み行かねば。

今宵も星が風にふきさらされる。

（伊吹郷訳[37]）

星は、真っ暗になるほど、闇が濃いほどに輝きを増す。その光りから韓国人は、「希望」、「理想」を思い起こし、比喩として使ったのである。

ここでの星は、流れ星や彗星でもない。変わらぬ星、心の北極星（ポラリス）である。世俗に染まってない者が人生を考えたとき、困難があっても自分の信じている道を歩いて行く。そんな人間が、闇の中で道に迷ったとき、この星が人生の方向を照らしてくれる。

このように北極星は、韓国人が絶対的に支持する詩でも愛されている。それはドラマにも顕著に表れている。本章では具体的に、「北極星」と「北斗七星」が描かれるドラマから、星がどのように描かれているのかを見ていく。

1「北極星」で自立する女性を応援する『インビテーション - 招待』（1999、KBS）

ドラマに登場する三人の女性は、高校時代からの友人である。ヨンジュはホテルの広報室勤務、ミヨンは雑誌社の女性カメラマン、サビンは精神科医として、それぞれ社会で経済活動をしている。韓国人の多くの女性がそうであるように、彼女たちも家族や友だちを思いながら、儒教的価値基準に従って生きていた。だが、変わりゆく社会と自分たちの身に起こった出来事から、不満や疑問を感じはじめ、これまでの伝統的な儒教軌範に従って生きるのではなく、新しい価値観を見いだすべき未婚の母を選択したり、年下の男性に求婚をしたり、婚約者に別れを切り出し、愛する男性のもとに行くなど、韓国社会で変わりつつある現代の女性たちを描いている。ドラマの内容も、従来のドラマで取り上げられなかった「婚前性関係」「同棲」「未婚の母」などが描かれている。ミヨンは未婚の母、ヨンジュは、仕事か結婚か選択を迫られ、二人の人生の模索が始まる。その過程で、北極星の描写があり二人を望むべきところへと導く。

はじめに、ミヨンである。彼女は、大学時代から自由な恋愛を楽しみ、愛は快楽と割り切って男性と付き合ってきた。ところが、スンジンと付き合って３か月、彼女は妊娠していることに気づき、中絶をしようするが踏み切れず悩み、精神科医のサビンに打ち明ける。ミヨンは「スンジンに愛されている確信がないから」、「男をつかまえる口実に、この子を使うのは、申し訳なくて」という理由から妊娠を話さなかったと語る。不安な気持ちを抑えながら、夜空を見てスンジンから教えてもらった北極星の話をサビンにする。その会話が、以下である。

ミヨン：
　見て、あの星。遠くない？
サビン：
　だから美しく感じるのよ。
ミヨン：
　北極星、どれだかわかるの？
サビン：
　見つけてみる？

【図６】北極星を見て気持ちが落ち着くミヨン[38]

ミヨン：

あのね。彼が教えてくれたの。あの北の空で、あの星はいつも同じ場所にあるって。

（『インビテーション - 招待 -』第 2 話）

次にヨンジュである。彼女は、大学の英文科を卒業すると、ホテルの広報室で事務をしていたが、ある日、会社から部署異動を命じられ、ホテルを辞めることになる。意に沿わない異動であったが、少しの退職金をもらって、転属先の高級ホテルの食品事業部で、レストランのホールウエイトレスのキャプテンとして働くことになる。婚約者のドンソクは、「キャプテンとはいえウエイトレスだろう」、「子どもができたら辞めるんだし」と、鼻からウエイトレスの仕事を馬鹿にし、結婚したら仕事を辞めると頭から決めつけて話す。

だがヨンジュは、結婚しても仕事を続けようと考えていたが、ドンソクの中には、韓国の慣習である「男女別有」が存在し、女性は家庭を守るのが役割で、職場の仕事より家庭の仕事を重視すべきという社会的意識があった。母親も「結婚したら、仕事を辞めなさい」と、「男は家族を扶養し保護すべきであり、女は家族員に安らぎを与えるような暖かい家庭作りに専念すべし」という伝統的な性別役割分業観[39]を持っていた。

婚約者と母親にも理解されず悩んでいたところに、久しぶりに会った小学校の同級生のスンジンと再会する。彼は外交官の息子だったため、8 歳から 13 歳までしか韓国には住んでなかった。そのスンジンが、ヨンジュに北極星を見せてやると手を引っ張って、一緒に北極星を探し、星の意味を彼女に教える。それが、以下である。

スンジン：

昔、東橋洞の線路で星を見たよな。北極星を見せてやる。見てみろよ、向こうの北の空、分かるか? あっちに、北斗七星が見えるだろう。W 字の形のカシオペアは？　二つの間にあるのが北極星だ。見えるだろう。北極星は二等星だから明るくはないんだ。でも季節に関係なく北の空にある。山で迷った人が北極星を頼りに助かった。俺も一番明るくはないけど、すぐに見つかるよういつも同じ場所にいるよ。

ヨンジュ：

スンジンって、口説くのが上手そうね。

スンジン : 口説く？

ヨンジュ : 私、帰るわ。

スンジン：

待って。俺、新しい道への第一歩を踏み出した気分だ。この先は見えないけど歩き続けるよ。後戻りしたくない。ヨンジュ、君は俺の方に近づけなくても俺が近づいた分逃げないでくれ。

（『インビテーション - 招待 -』第 2 話）

ヨンジュはこの日、スンジンから聞いて、北極星の探し方と星の意味を初めて知る。彼が北極星となってヨンジュを照らし、守ってくれるという愛の言葉に勇気をもらい、結婚か仕事かで悩んでいたが、その両方を手に入れることを決心する。そのため、先輩キャプテンやウエイトレスの厳しい研修にも耐え、乗り越えていくことができる。北極星は、ヨンジュが女性の新しい道へ進めるよう背中を押してくれたのだ。

スンジンは、ヨンジュとミヨンの二人に北極星を教えているが、その内容は少し違っていた。スンジンがミヨンに教えた北極星は、北の夜空に輝く星といったように、北極星の位置を教えただけのことであって、そこには、ミヨンに対する特別な思いや意味はない。一方、ミヨンはスンジンの心変わりと初めて妊娠する不安から神経過敏になっていた時、いつも同じ位置にある北極星を見て心の安定を得ている。

このように、北極星は韓国人にとって身近な星であるが、その存在は大きく、はるか遠くで季節が変わっても動かず、闇の中輝いている一つの星に、人生に迷った時自分の望むところへ強く導いてくれる希望の星として捉えられている。

2「北斗七星」で夢や希望を持たせる『善徳女王』（2009、MBC）

『善徳女王』は、朝鮮半島で初の女王となった徳曼の生涯を、史実を交えて描いた時代劇である。実在した善徳女王は、新羅第 27 代（在位 :632 ～ 647）王として、多くの功績を残した。

徳曼が女王になった新羅は、朝鮮半島の中でも東南部に位置し、北の高句麗と西の百済の制約を受けて、直接中国大陸との流れが阻まれ、高句麗と百済を通じて中国大陸の文化を間接に導入するといった小部族国家の連合体として発足した[40]。

物語は、新羅の領土を広げつつあった、第24代眞興王の啓示から始まる。花郎の総指揮者である国仙の文努が、王の幻影を見て啓示を受ける。

天気が良い昼間、野原の木の下にいた文努の前に、護衛兵を数人伴って現われたのが眞興王だった。王は次のように文努に話し、彼は幻影を見る。それが以下である。

眞興王：

文努よ、もはや北斗七星が八つにならぬ限り、美室に敵う者はこの世におらん。美室に立ち向かえる者は、北斗七星が八つになる日に現われる。北斗七星を見るのだ。

文努の幻影：

王の言葉に従い、昼間の空に薄ぼんやり光る北斗七星を見ていると、北斗七星にある二つの星が飛び出す。地上へ流れ落ちていく先に開けた山道を行くひとつの輿が見え、星は輿に近づくと、眩いばかりの光を放す鳳凰となって輿に入った。

（『善徳女王』第1話）

不思議な体験をした文努は、誰にも言わずその意味を考える。小さい国が生き残るには、三国の統一しかないと考えていた眞興王の思いと、北斗七星の啓示を探り続ける。

なぜ、眞興王がこの言葉を文努に伝えたか。実は、眞興王の側室美室は、色香と政治感覚を武器に宮廷を牛耳り、王妃の座を狙っていた。眞興王までも、美室は毒殺してしまう。神権の美室に、勝てる者がいなかった。美室は、民の暮らしなど考えない権力者だった。

【図7】『和漢三才図会[42]』の北斗七星

啓示から4年後、文努は皇后の出産が近づいたので、北斗七星の観測をはじめると兆しがあった。

北の空を守る七つの星、北斗七星からだった。北斗七星は人間の運命と寿命、吉凶をつかさどる聖なる星だった。その中でも、第六星の開陽は空を開く星で王になる人が生まれる時には、その星が明るく輝くと、長い間言伝えられていた。眞興王が生まれた時にも、開陽星がひときわ明るく輝いたために、眞興王の星ともいわれている[41]。

文努は目を見開いて開陽星を見ると、他の六つの星とは比べものにならないほど明るく輝いていていることがわかった。開陽星が割れるときの描写が、以下である。

水の中のように静かだった望楼に強い風が吹き始めた。何日か前に積もった雪や土ぼこり、草が混じった突風だった。地震でも起きたかのように望楼が激しく揺れ、不思議な音が聞こえてきたのはしばらくしてからだった。巨大な獣の咆哮のようでもあり、深い大地の底が揺れているような音でもあった。文務は望楼の壁をしっかりと握りしめ、焼けつくようなまぶたをしっかり開いた。文努は四方を見渡したが、彼に聞こえるこの唸るような音は、他者には聞こえてないのか、花郎もまったく変わった様子はなかった。垣根の桃の葉一枚揺れていなかった[43]。

北斗七星の異変に気づいた美室と弟の美生は、以下のように話している。

美室：

あれは何ですか？

美生：

あれは北斗七星。開陽星の隣に何か見えるな？

美室：

星が増えておる

美生：

なぜだ、北斗七星が八星に？

（『善徳女王』第3話）

【図 8】北斗七星を見る美室の弟 [44]

やがて北斗七星に異変がこり、開陽星が二つに割れた瞬間に、麻耶皇后は産気づき産室で女の双子を出産する。啓示どおり、民を塗炭の苦しみに追いやっている美室に対抗する者がついに誕生する。だが新羅には、始祖朴赫居世王の時代からの言伝えとして、「御出双陰　聖骨男殄」がある。女の双子児が生まれれば、聖骨の男の種が絶え、王宮が滅びるという意味で、民間ですら大きな災禍をもたらすとして、捨てたり、殺したりしていた。

そこで、文努は啓示を思い出し、双子が生まれた事実を隠蔽するため、妹の徳曼を侍女に託して城外に逃がす。姉の天明は宮廷で、徳曼は自分の出自を知らないまま遠く離れた砂漠で逞しく育つ。

さて美室だが、北斗の七つ星が八つなることは不可能なことで、現実には有り得ないことから、高をくくっていた。だが、自分の目で開陽星が二つになった北斗七星を見て、文務と侍女が助け出した赤ん坊こそが、自分の立場を脅かす者だと悔しがり、追っ手を差し向ける。

15 年後、徳曼は砂漠の交易の所で暮らしていたが、自身の出生の秘密を知る文努を探しに新羅へやって来る。彼女はそこで、女性であることを隠して花郎になる。やがて自分の出生が明らかになると、新羅の王女の身分を取り戻すために、美室と知恵と徳で対決する。そして、「自分が新羅の王になる」と誓う。美室がなぜ神権を手に入れたかを考えた時、それは、旱で雨が降らず農作物が取れない時、天を占って雨を降らせるからであった。だが、美室の情報は、隣国明の暦を極秘に入手し、それを基に朝鮮の暦と照らし計算して告知したからであった。

やがて徳曼は、日食を予言し王女として王宮に迎え入れられる。美室から神権を奪い取った徳曼は、天文台、瞻星台を建て、暦を民衆に公開し、民が穀物栽培に活かせるよう希望を与える。さらに、民の声に耳を傾け、荒れ地を開墾出来るよう、良質な鉄で農具を作り与えたり、租税改革に取り組んだりと、女王という弱点をものともせず、逆に女性だから気づく、考えつく柔らかな政治を行ない民衆の心を掴む。そして、民が飢えることなく、穏やかに暮らせるよう心血を注いだ王となり、さまざまな文化を築き上げた。

『善徳女王』に出てくる星は、北極星や北斗七星で、北斗七星は命の誕生を知らせる星として描かれる。これは、金庾信の北斗七星の痣と似て、英雄の誕生を表わしている。徳曼は、北斗七星の力をもらい、美室と貴族に支配されていた新羅王朝を復活させ、眞興王時代から念願だった朝鮮半島の統一の基盤を作った。

このように、統治者として、民が平穏に暮らせるよう努め、自尊心を失うことなく国を守ろうとした女王の姿は、民の心の中に永遠に息づいている。そのため現在でも、善徳女王を称え慕う民衆の心は 1500 年間も続き、今も韓国の府仁寺では、毎年旧暦の 3 月 15 日（陰暦）に、崇思慕祭が開かれている [45]。

3「星」で団員を元気付ける『ベートーベン・ウイルス―愛と情熱のシンフォニー』（2008、MBC）

韓流ドラマに出てくる星は、特定な星が多く、主人公のせりふとして描写される。しかし、中には名もない星だが、その星が、人生を迷っている人を元気づけたり、方向性を示してくれる場合がある。そんな描き方をしているドラマが、『ベートーベン・ウイルス―愛と情熱のシンフォニー』（2008、MBC）である。

一般公募で集まった職業も性別も年齢も違う個性的な団員たちと、音楽会では知らない人がいないほどの実力だが、激烈な性格のマエストロ、カン･マエが、クラシックオーケストラ結成という夢に向って奮闘していく物語である。星が出てくる場面は、指揮者のカン・マエと警察官のカン・ゴヌの会話にある。その会話が出てくるまでの話はこうである。

市役所文化芸術課に勤めるルミは、自分が作った企画書が採用され、「プロジェクト、オーケストラ」の運営を任される。ところが運営資金をプロデューサーに横領され、仕方なく団員を一般公募にする。必死に集めたメンバーは、停職中の警察官カン･ゴヌ、

生活に疲れた主婦、認知症の老人など、素人の人材ばかりだった。そんな楽団に指揮者としてルミが招聘したのが、オーケストラ・キラーと悪名高い世界的マエストロ、カン・マエであった。カン・マエは、しぶしぶこの仕事を引き受け、団員にきつい言葉で怒鳴ったりするが、懸命に努力する人を見守り応援する温かな心をもっている。

ゴヌの停職が解かれた日は、楽団公演当日で、団員たちは、彼の来るのを待っていた。ところが、ゴヌは路上で交通整理をしていた。それを見たカン・マエは、ゴヌに近寄り、「いま、この瞬間、君は幸福か?」と問いかける。その時のせりふに星が出てくる。それが、以下である。

カン・マエ：
　指揮の勉強のことは？
カン・ゴヌ：
　したかったです。
カン・マエ：
　それで？
カン・ゴヌ：
　でも、夢のままに。
カン・マエ：
　行動もせずに、夢といえるのか？　それは星だろう。見つめることしかできない。そんな話はしてない。行動すべきだろう？　少しでも努力して、計画ぐらい立てるんだ。それでこそ夢だと言える。それもせずに、夢を語る資格はない。叶えろとは言わん。夢ぐらい見ろ。（中略）「俺は努力もせずに、夢をあきらめた」そう思いながら一生暮らせばいい。「指揮がしたかった」と死に際に叫ぶのもいいだろう。

（『ベートーベン・ウイルス』第５話）

【図９】ゴヌを励ますカン・マエ[46]

カン・マエの、「動かないで自分の夢をあきらめるな、努力や挫折を無くして夢はかなえられない」という熱い言葉は、交差点で交通整理をしている警察官、ゴヌの心を激しく揺さぶる。カン・マエは星を例に挙げ、ゴヌの歩むべき道を指し示している。具体的な星の名は言ってないが、北極星を意味している。ゴヌは、彼の言葉によって音楽の道に進む決心をする。

これらの星描写でわかるように、韓国人の場合は、星を見て星から元気をもらうというよりは、自分を導いてもらおうとする意識が強い。そのため、韓流ドラマで描かれる北極星は、みな同じ描き方をしている。それに対して、日本人は、北極星に対してそのような思いはなく、単に北を指し示す星なのである。

次章では、韓国の古い書物『三国史記』、『三国遺事』他などを手掛かりに、韓国人と星の関係を詳しく見ていく。

Ⅳ　韓国人と星

星が生活に溶け込んでいる韓国人と星は、どのような関わりがあるのか。その手がかりになるのが、天地開闢の話である。

はじめに、天地創造からはじまる日本の神話だが、『古事記』には、「夫れ混元既に凝りて、気象未だ効れず。名も無く為も無し。誰か其の形を知らむ[47]」（そもそも宇宙の初めに、混沌とした根元がすでに固まって、まだ生成力も形も現われなかったころのことは、名付けようもなく動きもなく、誰もその形状を知るものはなかった）とあり、そこには星は出てこない。

それに対して韓国では、神話や説話の天地開闢に星は出てくる。例えば、朝鮮半島の西南に位置する済州島に伝わる「天主王本解」がそれである。それが以下である。

　世の中の最初は暗黒と混沌の状態であったが、しだいに開闢の気運が漂い、天から青い露が降り、地から水露が湧き起こり、世の中に万物が生じた。そのなかでも星が最初に現れ、東方には牽牛星、西方には織女星、南方には老人星(龍骨座の主星でシリウスに次いで明るい。略)北方には北極星、そして天の真ん中には三台星（大熊座に位置する紫微星を守るとされている星。略）が座を占めた。するとしだいに雲が起こり、天皇鶏が鳴くと夜が明けはじめた。続い

て玉皇上帝が、太陽と月をもたらして、明るい世の中になったということである[48]。

この神話では、星は「太陽や月よりも先に存在し、宇宙の光明、光を表すもの」とされている[49]。これらを考えると、韓国人は、太古の昔から、星と関わってきたのではないだろうか

また、朝鮮半島における現存する最古の文献『三『三国遺事』（一念、1206-1289）、『三国史記』（金富軾、1075-1151）、朝鮮時代の『承政院日記』をみると、自然現象の中でも、星に関する出来事の記録が多く残されている。星と韓国人の関係、つながりを考えた時、古朝鮮の史書にある記録は重要である。歴史的文化はもちろんのこと、先人の精神を今窺い知ることができるからだ。

『三国史記[50]』には、さまざまな星が記録されているが、中でも頻繁に出てくるのが、彗星、流星、太白（金星）、熒惑（火星）といった星である。その内容から、禍や不吉な予兆をイメージする星であることが読み取れる。たとえば、彗星や流星は、韓国では王朝の興亡を左右する大事件や、兵乱が発生する予兆と解釈され[51]、熒惑（火星）は、災禍や兵乱の兆しを示す星[52]とされていた。

日本でも『日本書紀』、『続日本紀』に、彗星、金星、熒惑（火星）が出てくるが、良いイメージではない。彗星は、ハハキホシ、妖星とも呼ばれ、彗星が現れると災害をもたらすとされた[53]。太白は、夕方の金星を指す星である。（金星は明星ともいうが、それは明けの明星のこと）この星も、太白が正しい位置にいない時は、しばしば乱が起こるとされる[54]。『続日本紀（上）』には、元正天皇の養老六年（722）七月十日に「太白（金星）が昼間見えた」（初出）、七月二十八日、太白が歳星（木星）に異常接近した。五月からこの月まで雨が降らなかった。聞くところによると、今年は雨が少なく稲が実っていないという[55]記述がある。

また、熒惑（火星）は、陰陽道、宿曜道など日本の星占いでは、不吉な星で乱、飢饉、災火が起こるとされる[56]。このように、これらの星は、韓国と同じ星観を日本人ももっていたことが分かる。

筆者が三国（新羅、高句麗、百済）の星の記述を『三国史記』と『三国遺事[57]』で調べてみたところ多かったのが新羅であった。資料の量が一様ではないことについて『三国史記』には、「本書の編纂当時は、高句麗・百済が滅亡されてからすでに5世紀の歳月が経過した時点である。新羅だけは上の二国の文化を吸収し、なおも国を保つこと二世紀におよんでいる。そしてこの統一期の新羅の文化はそのまま高麗に引き継がれたのである。したがって三国の資料の中でもっとも豊富なのを高麗に残したのは新羅であるが、それに比べて高句麗・百済は貧弱であったようで、新羅に関しては比較的詳細に記述されているのに反して、麗・済はすこぶる疎略である[58]」と記してある。また、山田恭子は、「三国の歴史を整理するのに、覇権的な論理で中国と戦い敗れた高句麗の伝統より、柔軟な外交術と忠義の道徳精神で三国統一をなした新羅の歴史を高く評価する立場から叙述された[59]」と述べている。

その新羅は、儒教を政治理念として取り入れた時代であった。だがこの新羅時代は、眞興王（第24代）をはじめ、眞平王（第26代）、善徳王（第27代）他の王が、皇竜寺、仏国寺、奉元寺など、たくさんの寺が当時竣工され完成している。寺の建立があったことからも、この時代は、仏教がまだ重きが置かれていたことがわかる。

では、三国時代はどういう星が出ていたのか、『三国史記』と『三国遺事』から、筆者が星の種類と数を拾い出してまとめてみると、46種類の星と190回の星の記述が見られた。中でも、彗星の異名である孛星・長星・妖星・客星が最も多く56回で、全体の約3割を占めている。2番目に多いのが流星の30回、3番目が20回の太白星（金星）となっている。続いて4番目が9回の鎮星(土星)、5番目が8回の熒惑(火星）である[60]。この数字から分かるように、上位を占めているのが、不吉な予兆、災害がもたらす、禍があるといった凶をイメージさせる星で、全体の6割強を占めている。

凶をイメージする星が多い背景には、三国がそれぞれの国を創建し、いずれかの王が、朝鮮半島を統一しようとする野心と夢の実現に向けての戦いが絶えなかったからである。そのため、王や武官、兵士たちは、彗星や流星が戦いの勝敗を左右する重要な星と解釈しために、日官がしっかりと記録に残し、戦いに活用し優位にしようとした。

また、この時代は、儒教よりも仏教のほうが重きをおかれていた。そのため、天帝の星である「北極星」

の記録はなく、儒教の教えとされ、古来から時刻を知ることができる重要な役割を果たす「北斗」（北斗七星）も１回しか出てこないなど、その存在感が薄い。しかし、少ないながらも、儒教を認識させる星の記録もある。それが、紫微や紫宮といった、天帝の在所とされる星などである。「心星」は、日本では、北極星の和名であるが、『三国史記』に出てくる「心（宿・なかご）」[61]は、二十八宿の一つで、東方青龍七宿の第五宿で、距星はさそり座α星（北極星は、こぐま座α星）であって北極星ではない。つまり、三国時代はまだ「北極星」は、力をもっていなかったのである。

これは、儒教との関係が深いのではないか。やはり、韓国人が感じる「北極星に強い思いを寄せる」背景には、李氏朝鮮王朝時代の「儒教」があると考えられる。

北極星は、1392年に李成桂が儒教を理念として建国した朝鮮王国になると、よく出現する。なぜ、この時代になって出てきたのか。その背景にあるのが儒教である。李氏朝鮮王朝時代は、儒教の中でも朱熹の「朱子学」を取り入れた。朱子学は、孔子が唱えた、家族を中心とした父母兄弟を大切にする「五常」と「五倫」を重んじたのに対して、大義名分・君主父子の別で、上下関係を大切にする[62]ことを重んじた。その儒教で最も重要なのが「北極星」である。なぜ北極星が重要なのか、それがわかるのが、孔子の『論語』「為政編」で、その中で、北極星は不動の中心だと記している。この言葉は、前述した通りで、不動で至高な星になること。これが儒教的な意味での道徳的完成者への道で、星々はポラリスを信じ従う[63]。

韓国人が、大きな力が働く中心に従っていく、向って行こうとする精神世界の根源がここにみられる。そのため、求心力となる動かない星「北極星」を、韓国人は憧れそして好むのである。

では次に、朝鮮王朝時代に重要視された北極星、と北斗七星は、具体的にどのような意味をもつ星なのか順に見ていく

1　北極星ー王を象徴する星

朝鮮時代の文献にはたくさん出てくる北極星が、実は、民話、昔話などの伝承からはほとんど見当たらない。その理由として考えられるのが、北極星は王と関連した意味として捉えていたことにある。方角の北方と中国の天体思想と深く関わるからである。それを述べる前に、韓国の神話に少し触れることにする。

韓国では、支配者の天降り神話が顕著であるが、それは王権ないし王権の神聖性の根源にあるという観念にもとづいている[64]。古朝鮮の檀君神話によると、天帝桓因の子桓雄は天府印３個を父より授けられ、徒3000を率いて太伯山頂の神檀樹の下に降臨した。洞窟に虎と熊がいて人間に化すことを願ったので、蓬と大蒜を食べて忌籠るよう教えると、熊だけが女となり桓雄と結婚して檀君王倹を生んだ[65]という話は有名である。このように熊女が洞窟の中で孵化の期間を耐えることによって、一人の女性となる。一方、神格的な存在であった桓雄は妊娠を望む熊女と交わるために、一時的に人間の男性となる。このような神話は、ギリシャ神話など西欧のものとは異なり、鬼神や獣、動物など人間以外のものが人間に姿を変える[66]。このような変身譚の神話が、朝鮮の祖先たちの国づくりの過程を表している。

朝鮮民話、昔話を見てみると、虎に関する話、人参をテーマにした話、親孝行譚、死と生、霊魂、科挙を素材とした話が多く[67]、北極星をそこにみることができない。もともと韓国では、天文学は自然現象の研究と密接な関係を持っており、伝統的に、すべての天象が政治にも気象にも重要な意味を持つと解釈されてきた[68]ので、民話などで伝承することが難しかったと考えられる。

日本でも、天の思想が大きな影響を持ち、中国の暦や織女と牽牛の話などの伝説も伝えられて変化しながら今日まで残っているものの、北極星にまつわる民話を探すことは、難しい現状にある。韓国も同様であるが、伝承等で探すことができなかった北極星が、韓国の文学作品では、星（とりわけ北極星）は「王の象徴」とされ、李朝時代の詩歌に多く見られる[69]。

では、日本においての北極星の記述や伝承にどのようなものがあるのか。『続日本紀(上)』の元正紀に「朕の誠意が天に通じず、つつしんで天意を占ってみても、よい結果がでない。（中略）　太上天皇は忽ち天下を捨てて長逝された。朕は真心から、北極星の位置が変わることのないように、太上天皇が永く人民をかばいまもり[70]、（以下省略）」と元正天皇が太上天皇のために北極星に祈ったが、亡くなった悲しみを記している。

さらに、北極星は不動の星とされてきたが、「北極星が動くことを発見した人」として伝えられている民間伝承がひとつある。浪速の船頭桑名屋徳三の女房は、北極星が動くことを発見し、夫の桑名屋徳三にそれを伝えた利発な妻がもとになっている話である。名船頭となった桑名屋徳三は、江戸時代の随筆、『雨窓閑話』や『雲錦随筆』などにも出てくる[71]。「北極星の動きについては外国には何の説話や伝説がないので、珍重すべき説話として永く推称したい[72]」と民俗学者の野尻抱影は述べている。

日本の北極星の伝承に登場する人物は、殿様、武士、学者でもない。船頭という庶民生活に欠かせない職を持つ男とその妻であった。王という大きな権力を持った人物は、ここには登場しない。

韓国に北極星の民話が見られない要因に、韓国人の星信仰があるのではないか。韓国においての、星に関する信仰は、道教（中国）の北極星信仰、北斗信仰に由来する。北辰信仰に関する研究書を紐解くならば、『書経』、『易経』、『礼記』といった儒教であるところの六経にあたるものの中に、北辰に関することが断片的に記されている[73]からである。

北極星には、このような韓国人の儒教的価値基準が背景にあることから、北極星は、不動の星、至高な星、崇高な星という宗教的なまでの憧れと信頼[74]として捉えられ、北極星は伝承というより、「王の象徴」であった。航海や漁業で生活を支える人たちにとって北極星は、命綱で大切な星であるが、もう一つの捉え方「人々を導いてくれる特別な星」があることから、北極星の昔話等は難しかったと考える。

2　北斗七星ー人間の礎となる星

韓国の天文学の知識は、682年に唐から帰国したトーチュンが、中国の天文図を新羅に持ち帰り、その後すぐに中国の天文知識は朝鮮半島を経て日本に伝わった[75]。このことから、韓国の天文学は、中国の影響を色濃く受けていることがわかる。そのため、星にまつわる説話を語るとき、古代中国の宇宙観と天文学はかかせない。

北斗七星について、中国科学院自然科学史研究所のシャオフン・スン教授は、司馬遷の『天官書』には、天帝の力が及ぶ範囲は、北斗七星（北の柄杓、おおぐま座）の動きによって示され、北斗七星は天帝の乗り物であり、中心（天の北極）の周りを回りながら、帝国の四方を視察し支配する[76]と述べている。北斗七星は、天帝が乗る車とも「七人の警備官」とも考えられている星なのである。つまり、北斗七星は、天帝と非常に親しい関係にあるため、彗星や流れ星とはその意味あいが違うのである。

韓国における北斗七星の記述は、わずかに『三国遺事』（巻一）「紀異第一　金庾信」に載っている。三国時代に力をつくして、三韓統一の貢献を果たした金庾信の身体に、北斗七星の文様があるという。それが以下である。

> 庾信は眞平王十七年乙卯（595年）に生まれたが、七曜の精気を受けたので、背中に七曜の文様があり、また不可思議なことが多かった[77]。（原文：庾信公以眞平王十七年乙卯生。稟精七曜。故背有七星文[78]）。

庾信の出生は、神話的要素を含んだものとして書かれ、天に選ばれた人であることの証のように受けとれる。壮大な星のエピソードは、日本の説話で探すことが難しい。星と人間の結びつきの濃さというものは、韓国人の星観の特徴といえる。

韓国の北斗七星の起源説話として有名なのが、七人の孝行息子が死んで星になった話の『星になった七人のむすこ』や七星神の由来を語る巫俗神話で、特に全羅北道を中心に韓国全土に広く伝承されている『七星ボンプリ』がある。この他に、韓国では、ものさしという道具は、古くから正義をはかったり、生命をつかさどるものと考えられ大切にされてきた[79]ことから、昔話『ふしぎなしろねずみ』には、裁縫道具にかかせない＜ものさし＞に、北斗七星の模様があしらってある。

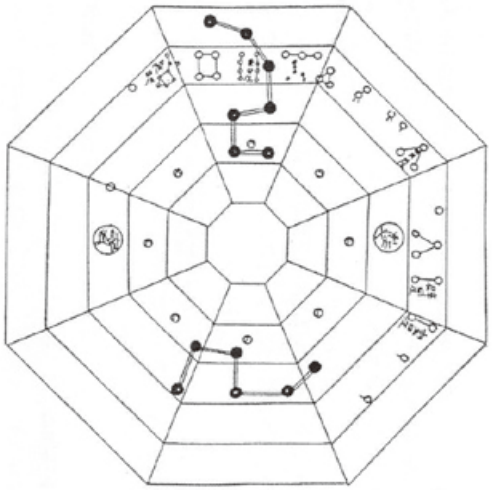
また、北斗七星の七つの星は、人間の寿命を司る役割があると考えられてきた。それがわかるのが、李朝時代に中国語で書かれた『筆苑雑記』で、息子の寿命を延ばそうと二人の僧に懇願し息子の十年延ばしたが、天の秘密を明かしたことから父親は、十年早く死んだ。二人の僧は、南の南斗六星と北の北斗七星だった[80]。この話は『北斗七星と短命少年[81]』や『北斗七星と寿命[82]』としても知られているが、「19歳までしか生きられない」という男の年齢や、二人の顔色や衣服の色の表現に違いはあるが、南山に登って二人の僧に哀訴し、寿命の延命が叶えられるとこ

ろは同じである。南斗六星は、北斗七星と真逆な空の位置にあるが、ともに、天子に係わる星で、南斗は寿命を掌るという重要な星である。

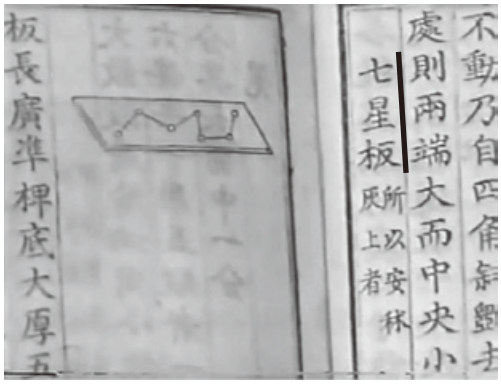
北斗七星は、今でも寿命神、財宝を守る神「七星さま」といって親しまれ、日常的に祈りを捧げられている。七星さまへの祈りは、以下である。

お願いです。七星さまに、お願いです。
お願いです。お願いです。
天神さま、七星さま、お願いです。
家族一同が健康でいますよう、お願いです。
息子〇〇〇が元気で、勉強をよくして、出世できるよう、お願いです。
他郷へ出かけている〇〇〇が無事でありますように、そして患わず、学業に熱心でありますように導いてください。
くれぐれもお願いします。
家族が元気にくらせますよう、お願いします[83]。

北斗七星は寿命神であり、財宝を守るものである



【図 10】高句麗壁画古墳の星宿図[84]



【図 11】七星板[86]（縦線は筆者）

が、民間で祈るときは祓いの要素も併せ持っている。韓国の人々にとっての北斗七星は、古代朝鮮時代から現代にいたるまで、人間の礎となるものを教え導いてくれる星であるため、説話も内容が豊富で一様でないのである。

韓国人は特に、北斗七星に寄せる思いが強いと言われているが、古くは、高句麗の人びとも同じことがいえる。それがわかるのが、高句麗壁画古墳の星宿図である。数多い古墳のその中にあって北斗七星は、ほとんど全ての星座図墓に描かれ、北壁の墓主図の横に位置し、墓が創りだす小宇宙の中心的な役割を果たしている。

また、現代においても葬礼の際には、遺体を安置する時に七星板を敷く慣習が伝わるっている[85]。

このように、北斗七星からは先人の深い信仰が読みとれる。

これまで見てきたように、北斗七星を古代星座図や伝承、説話からみると、親孝行、人の寿命、恩返し、財宝、健康など多岐にわたっていることから、先史時代から現代に至るまで、人間を導く尊い星として敬われ続けてきた人間の礎の星といえる。

おわりに―韓国人の精神を支えた北極星

これまで述べてきたように、日本人の星観と韓国人の星観はまったく異なっている。東日本大震災で被災した人たちが思いを寄せた星からも分かるように、日本人が好む星は満天の星や流れ星のような名もない小さな星なのである。数こそ少ないが、小説やドラマなどに取り上げられている星も、実は名もない星なのである。その背景には、はかないもの、もののあはれといった、この世のものはすべて変化し消滅していく様に美意識を感じる日本人の精神世界と関係が深い。だが韓国人が好む星は、孔子の『論語(為政第二)』に書かれている天の中心にある、不動の星の北極星とその周りを動く北斗七星である。

韓国は、朝鮮王朝時代に儒教の朱子学が国教となると、本格的に民衆に浸透していく。北極星には、このような韓国人の儒教的価値基準が背景にあることから、北極星は不動の星、至高な星、崇高な星という憧れとして捉えていた。そのため、北極星に対して「道しるべ」を感じ、人生に迷った時、夢を叶えたい時に強く引っ張って欲しいと思うのである。そのような心理が働く裏には、努力すれば身分を超えて、

少しでも高い位置に行けるかもしれないという夢があるからで、その夢を叶えるために自分を強く引っ張って欲しいと星に頼むのである。このように捉えるのは、韓国人だけである。その星観からドラマを論じていくと、韓国人の凄さというものが分かってくる。

近年、韓国はいくつもの大きな危機を乗り越え、著しい発展を遂げた。今では、社会システムを欧米が数百年かかって達成した変化を、日本は圧縮して五十年で達成したが、韓国人はさらに圧縮して二十年で達成し、領域によっては世界の最先端を走っている[87]。急激に発展した韓国は、韓国人の特徴であるパリパリ（빨리빨리 / 早く早く）、何でも急いでしまう文化があったから、この国は急成長できたと言われている。

だが筆者は、ここまで社会、経済、産業が発展してきたその背景には、朝鮮王朝時代から変わらぬ、不動の星への憧れである「北極星」の星観があったからではないかと思うのである。韓国人が求めている星というものは、精神世界で、自分にないものや、上への憧れや、大きな夢に向って頑張ろうとするものである。韓国人はそれをエネルギーにして、辛いときでも力強く頑張った結果、近代化、民主化、経済発展を成し遂げ、最貧国から一転して先進国の仲間入りをし、さまざまな分野で活躍している。

このように儒教社会が作り上げた韓国社会や文化は、1990 年から 2010 年に入ると多様化し、これまで描かれなかった名もない星が、北極星や北斗七星とともにドラマに出てくるようになってきた。それを考えるとこれからも、韓流ドラマに描かれる星に注目する必要がある。これを機に、韓流ドラマに描かれる星を、引き続きひとつひとつ論じていきたい。

---

1 韓流ドラマ研究家。元宇都宮市教育委員会職員。

2 緊急災害対策本部とりまとめ報「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について」（平成 31 年 3 月 8 日 8:00 現在）（内閣府防災情報のページ）。http://www.bousai.go.jp/2011daishinsai/pdf/torimatome20200310.pdf（2019 年 10 月 16 日検索）。

3 同上。

4 「『あの日』の星空 記憶を胸に」、NHK ニュース「おはよう日本」（2015 年 3 月 13 日放送）。http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2015/03/0313.html（2015 年 3 月 14 日検索）。

5 同上。

6 NHK 東日本大震災アーカイブス「あの日、わたしは」大江　宏　典、https://www9.nhk.or.jp/archives/311shogen/detail/#dasID=D0007011072_00000（2020 年 3 月 24 日検索）。

7 DVD『星から来たあなた』（NBC ユニバーサル・エンターテイメントジャパン、2015）。

8 林香里（2005）『「冬ソナ」にハマった私たち - 純愛、涙、マスコミ … そして韓国』文藝春秋、9 頁。

9 木嵜正弘編集（2004）『韓国ドラマガイド　冬のソナタ』日本放送出版協会、62-63 頁。

10 前掲（註 8）、40 頁。

11 同上、再引用。

12 高野悦子・山登義明（2004）『冬のソナタから考える - 私たちと韓国のあいだ』岩波書店、23 頁。

13 DVD『冬のソナタ』（NHK エンタープライズ / バップ、2003）。

14 太宰治（1975）『太宰治全集 3 巻』筑摩書房、178 頁。

15 藤原てい（1988）『流れる星は生きている』中央公論、70 頁。

16 『空から降る一億の星』（最終話、2002 年 6 月 24 日放送、フジテレビ）。

17 『鬼平犯科帳’75 丹波哲郎版 9 話流星』（1975 年、テレビ朝日）

18 『熱血シングル・ファザー新聞記者・新庄圭吾の事件ファイル 3』（2016 年 7 月 18 日放送、BS フジ）

19 『河北新報』情報ボランティア @ 仙台、プラネタリウム「星空とともに」、（2013 年 2 月 26 日付け）。https://kacco.kahoku.co.jp/blog/volunteer16/41179（2016 年 9 月 22 日検索）。

20 仙台市天文台 http:www.sendai-astro.jp/news/2017/02/2017.html（2013 年 2 月 26 日検索）。

21 「3 月 11 日の星空を再現　プラネタリウム、各地で」、『産経ニュース / フォトジャーナル』（2016 年 2 月 21 付け）http://www.sankei.com/photo/story/news/160221/sty1602210008-n1.html（2016 年 3 月 11 日検索）。

22 前掲（註 6）。

23 『下野新聞』（栃木県）（2016 年 2 月 28 日付け）、24 面。

24 前掲（註 2）。

25 前掲（註 4）。

26 「3.11 あの日の青空、誰思う　仙台のプラネタリウム番組、県立科学館で来月 / 山梨県『朝日新聞 / 山梨全県』（2014 年 2 月 28 日付け）、25 面。

27 前掲（註 19）

28 「震災の日の夜　被災者が見た夜空再現　平塚で 9，11/ 神奈川県」『朝日新聞 / 神奈川県』（2014 年 3 月 6 日）、29 面。

29 同上。

30 高橋道子「ティータイム / 満天の星空」『河北新報』（2013 年 4 月 2 日付け）。

31 同上。

32 「（女川一中）そばにいる、仲間がずっとそばにいる、東日本大震災」『朝日新聞 / 宮城全県』（2012 年 1 月 15 日付け）、35 面。

33 「高校生 300 人、震災を詠む　大崎の岩出山高」『朝日新聞 / 宮城全県』（2011 年 6 月 10 日付け）、27 面。

34 「17 歳あれから東日本大震災 6 年（上）－ 3.11　同じ夜空の下で」『朝日新聞 / 栃木県』（2017 年 2 月 27 日付け）、39 面。

35 前掲（註 19）。

36 Weblio 辞書、『三省堂 大辞林（第三版）』。　https://www.weblio.jp/content/%E7%84%A1%E5%B8%B8（2019 年 10 月 23 日検索）。

37 尹東柱、伊吹郷訳（1997）『空と風と星と詩 尹東柱全詩集』影書房、15 頁。

[38] DVD『インビテーション - 招待−』（ハピネット、2006）。
[39] 李璟媛「韓国における性別役割分業観と女子教育 - 教育現場における二十構造 -」（1993）『家族社会学研究（No.5）』87 頁。
[40] 千寛宇･金東旭編（1980）『比較　古代日本と韓国文化（下）』学生社、61 頁。
[41] 柳銀京著・藤本敏和翻訳（2010）『公式ノベライゼーション　善徳女王　巻 1』TOKIMEC パブリッシング、139 頁。開陽星をより詳しく説明するため引用する。
[42] 寺島良安編（1890）『和漢三才図会』（巻之 1/ 天文）内藤書屋、42 頁。（国立国会図書館デジタルコレクション）https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898160（2016 年 3 月 11 日検索）。
[43] 前掲（註 41）139 頁。開陽星が二つに割れた描写を、詳しく説明するため引用する。
[44] DVD『善徳女王』（フジテレビジョン、2010）。
[45] キム・ヨンヒ、クォン・ヨンス訳（2012）『善徳女王の真実』キネマ旬報社、226 頁。
[46] DVD『ベートーベン･ウィルス−愛と情熱のシンフォニー』（アミューズソフトエンタテインメント、2009）。
[47] 次田真幸（1977）『全訳註 古事記（上）』講談社、17 頁。
[48] 伊藤亜人監訳・編訳川上新二（2006）『韓国文化シンボル事典』平凡社、668-669 頁。
[49] 同上。
[50]『三国史記』は、朝鮮に現存する三国・新羅統一期を通じての最古の正史である。本書は、高麗の仁宗 23 年、（AD1145）12 月、金富軾が王命を奉じて撰進したもの。金富軾、金思燁訳（1997）『完訳三国史記』明石書房、1 頁。
[51] 前掲（註 48）、669 頁。
[52] 前掲（註 50）、191 頁。
[53] 出雲晶子編著（2012）『星の文化史事典』白水社、178 頁。
[54] 同上、205-206 頁。
[55] 宇治谷孟（2016）『続日本紀（上）全現代語訳講談社、243-244 頁。
[56] 前掲（註 53）、117 頁。
[57] 一然、金思燁訳（1997）『完訳三国遺事』明石書房。
[58] 前掲（註 50）、2 頁。
[59] 山田恭子「文学からの接近 : 古典文学史 - 時代区分とジャンルを中心に -」　野間秀樹編著（2007）『韓国語教育論講座　第 4 巻』くろしお出版、22 頁。
[60] 星の数と種類は、筆者が『三国史記』と『三国遺事』に書かれている星を拾い出して数えた数。孫済河『科学百話』には、彗星が観測された回数が高句麗では 10 回、百済では 15 回、新羅では 32 回、合計 57 回となっているが、三国で重複する回数を除いても 53 回の観測とある。孫済河（1992）『科学百話』啓明書房、17 頁。
[61] 前掲（註 53）、295 頁。林完次（1997）『宇宙ノ名前』光琳社出版、82 頁。「星・宇宙を表わす言葉・単語・異称の一覧」 https://hyogen.info/groupw/list/5439　（2019 年 10 月 23 日検索）。
[62]『日本歴史事典』https://nihonsi-jiten.com/ jyugaku-shushigaku-chigai/（2019 年 10 月 31 日検索）。朱子学の基本は、身分秩序や格物致知、理気二元論という考え方である。特に身分秩序に関しては、自然や万物に上下関係･尊卑があるように、人間社会も同じように、上下関係や差別があっても然るべきという考え方である。これを君主父子の別といい「君主の言うことを臣下は絶対聞くこと、父の言うことを子どもは絶対聞く」ことを意味する。
[63] 小倉紀蔵(2004)『韓国ドラマ､愛の方程式』ポプラ社､21 頁。
[64] 依田千百子（2009）「韓国の天空神話」『アジア遊学 121』勉誠出版、 66 頁。
[65] 監修 伊藤亜人･木村益夫･梶村秀樹･武田幸男（1986）『朝鮮を知る事典』平凡社、231 頁。
[66] 李在銑、丁貴連・筒井真樹子訳（2005）『韓国文学はどこからきたのか』白帝社、40-42 頁。
[67] 前掲（註 65）、409 頁。
[68] 海部宣男監修、栃田紀子 / 川本光子邦訳（2014）『アジアの星物語 − 東アジア・太平洋地域の星と宇宙の神話・伝説』万葉舎、328 頁。
[69] 前掲（註 48）、671 頁。
[70] 前掲（註 55）、245 頁。
[71] 野尻抱影（1978）『星の民俗学』講談社、17 頁。
[72] 同上。
[73] 写真・山本和信、文・前田憲二、萱沼紀子（1991）『渡来の祭り』風書房、129 頁。
[74] 前掲（註 63）、21 頁。
[75] 前掲（註 68）、328 頁。
[76] 同上、300-302 頁、再引用。
[77] 前掲（註 50）　107 頁。
[78] 同上、109 頁、再引用。
[79] 文 : チヤン･チョルムン､絵 : ユン･ミスク､訳かみやにじ(2009)『ふしぎなしろいねずみ 韓国のむかしばなし』岩波書店、1 頁。
[80] 前掲（註 68）、46-50 頁。
[81] 崔仁鶴編著（1974）『朝鮮昔話百選』日本放送協会、144-145 頁。
[82] 任東権（1995）『韓国の民話』雄山閣出版、68 頁。
[83] 萱沼紀子（1999）「星祭りのゆくえ―日韓北斗七星の比較研究」、『作新学院女子短期大学紀要』3 頁。
[84] 前掲（註 64）、74 頁。
[85] 前掲（註 73）、93 頁。
[86] 脚本･監督､前田憲二 記録映画『土俗の乱声』（1991）より。古代朝鮮三国、高句麗、百済、新羅から渡米した王族や豪族である神々たちの足跡を追い、その遺跡や遺物を通して古代日本の歴史の全貌をあぶりだした「神々の履歴書」の姉妹編として製作されたドキュメンタリー。https://www.youtube.com/watch?v=KBL7YbJjPNc（2017 年 10 月 1 日検索）。
[87] 小倉紀蔵「韓国文化･思想、日韓問題」、小倉紀蔵･大西裕･樋口直人（2016）『嫌韓問題の解き方 - ステレオタイプを排して韓国を考える』朝日新聞出版、13 頁。

参考文献

李在銑、丁貴連・筒井真樹子訳（2005）『韓国文学はどこからきたのか』白帝社
出雲晶子編著（2012）『星の文化史事典』白水社
一然、金思燁訳（1997）『完訳三国遺事』明石書房
伊藤亜人監訳・編訳川上新二（2006）『韓国文化シンボル事典』平凡社
伊藤亜人･木村益夫･梶村秀樹･武田幸男監修（1986）『朝鮮を知る事典』平凡社
任東権（1995）『韓国の民話』雄山閣出版
宇治谷孟（2016）『続日本紀（上）全現代語訳』講

談社
小倉紀蔵（2004）『韓国ドラマ、愛の方程式』ポプラ社
小倉紀蔵・大西裕・樋口直人（2016）『嫌韓問題の解き方 - ステレオタイプを排して韓国を考える』朝日新聞出版
海部宣男監修、栃田紀子 / 川本光子邦訳（2014）『アジアの星物語－東アジア・太平洋地域の星と宇宙の神話・伝説』万葉舎
木嵜正弘編集(2004)『韓国ドラマガイド　冬のソナタ』日本放送出版協会
金富軾、金思燁訳（1997）『完訳三国史記』明石書房
キム・ヨンヒ、クォン・ヨンス訳（2012）『善徳女王の真実』キネマ旬報社
千寛宇・金東旭編（1980）『比較　古代日本と韓国文化（下）』学生社
孫済河（1992）『科学百話』啓明書房
高野悦子・山登義明（2004）『冬のソナタから考える - 私たちと韓国のあいだ』岩波書店
太宰治（1975）『太宰治全集 3 巻』筑摩書房
崔仁鶴編著（1974）『朝鮮昔話百選』日本放送協会
チヤン・チョルムン、絵 : ユン・ミスク、訳かみやにじ（2009）『ふしぎなしろいねずみ韓国のむかしばなし』岩波書店
次田真幸（1977）『全訳註（上）古事記』講談社
寺島良安編（1890）『和漢三才図会』（巻之 1/ 天文）内藤書屋
野尻抱影（1978）『星の民俗学』講談社
野間秀樹編著（2007）『韓国語教育論講座　第 4 巻』くろしお出版
林香里(2005)『「冬ソナ」にハマった私たち - 純愛、涙、マスコミ … そして韓国』文藝春秋
林完次（1997）『宇宙ノ名前』光琳社出版
藤原てい（1988）『流れる星は生きている』中央公論
写真･山本和信、文･前田憲二、萱沼紀子（1991）『渡来の祭り』風書房
尹東柱、伊吹郷訳（1997）『空と風と星と詩 尹東柱全詩集』影書房
依田千百子「韓国の天空神話」（2009）『アジア遊学 121』勉誠出版
柳銀京(2010)『公式ノベライゼーション善徳女王 巻 1』TOKIMEC パブリッシング

＜論文及び学術誌＞
李璟媛「韓国における性別役割分業観と女子教育 - 教育現場における二十構造」『家族社会学研究（No.5）』（1993）
萱沼紀子「星祭りのゆくえ―日韓北斗七星の比研究」『作新学院女子短期大学紀要』（1999）

＜新聞、インターネット資料＞
①新聞
『朝日新聞 / 宮城全県』(2011 年 6 月 10 日付け、27 面)
『朝日新聞 / 宮城全県』(2012 年 1 月 15 日付け、35 面)
『朝日新聞 / 山梨全県』(2014 年 2 月 28 日付け、25 面)
『朝日新聞 / 神奈川県』(2014 年 3 月 6 日付け、29 面)
『朝日新聞 / 栃木県』（2017 年 2 月 27 日付け、39 面）
『河北新報』（2013 年 4 月 2 日付け、朝刊）
『下野新聞』（栃木県）（2016 年 2 月 28 日付け、24 面）

②　インターネット資料
NHK ニュース「おはよう日本」のホームページ http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2015/03/0313.html
NHK 東日本大震災アーカイブス「あの日、わたしは」のホームページ https://www9.nhk.or.jp/archives/311shogen/detail/#dasID=D0007011072_00000
『河北新報』プラネタリウム「星空とともに」、情報ボランティア @ 仙台のホームページ https://kacco.kahoku.co.jp/blog/volunteer16/41179
記録映画 (1991)『土俗の乱声』脚本・監督、前田憲二 https://www.youtube.com/watch?v=KBL7YbJjPNc
国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/898160
『産経ニュース / フォトジャーナル』http://www.sankei.com/photo/story/news/160221/sty1602210008-n1.html
『三省堂 大辞林 (第三版)』Weblio 辞書、https://www.weblio.jp/content/%E7%84%A1%E5%B8%B8
仙台市天文台のホームページ http://www.sendai-astro.jp/news/2017/02/2017.html
内閣 府防災情報のページのホームペー http://www.bousai.go.jp/2011daishinsa i/pdf/torimatome20200310.pdf

『日本歴史事典』https://nihonsi-jiten.com/jyugaku-shushigaku-chigai/
星・宇宙を表わす言葉・単語・異称の一覧 https://hyogen.info/groupw/list/5439

＜DVD資料＞
DVD『インビテーション - 招待』（2006）ハピネット
DVD『サメ - 愛の黙示録 -』（2014）NBC ユニバーサルエンターテイメントジャパン
DVD『善徳女王』（2010）フジテレビジョン / ポニーキャニオン
DVD『冬のソナタ』（2003）NHK エンタープライズ / バップ
DVD『ベートーベン・ウィルス－愛と情熱のシンフォニー』（2009）アミューズソフトエンタテインメント
DVD『星から来たあなた』（2015）NBC ユニバーサル・エンターテイメントジャパン

＜日本のテレビドラマ資料＞
『鬼平犯科帳 ’75 丹波哲郎版、9 話 流星』（1975、テレビ朝日）
『空から降る一億の星』（2002、フジテレビ）
『熱血シングル・ファザー新聞記者・新庄圭吾の事件ファイル 3 』（2016、BS フジ）
『流星の絆』（2008、TBS）

한국인과 별, 그리고 한류드라마
동아시아일본 대지진과「만천의 별」을 중심으로

정귀련・가시주크 에이코

＜요지＞

2011 년 3 월 11 일 동일본대지신이 일어난 밤, 만천의 별이 센다이의 밤하늘을 뒤덮었다. 지신으로 전기가 끈겨 칠흙처럼 어두운 밤하늘에 나타난 무수한 별을 본 피난지의 어떤 여성은「그날 밤 하늘을 뒤덮은 무수한 별들은 실은 망자가 길을 헤메지 않고 천국에 갈 수 있도록 이끄는 불빛이 아니었을까」라는 감상을 『河北新報』(仙台市) 에 투고하였다. 4 월 중순경에 이 글을 읽은 今野初美씨는 슬픔으로 미어졌던 마음이 조금이나마 위안이 됐다면서「春菜도 杏도 둘이 함께 천국에 갔음에 틀림없다」고 아사히신문의 인터뷰에 대답하였다. 이것을 보면 일본인은 이름도 없는 작고 무수한 별에 공감하는 정신세계를 가지고 있다는 것을 알 수 있다. 한편, 한류드라마에 그려진 별을 보면 일본인의 별에 대한 생각과는 전혀 다른 인상을 받는다.

예를 들면 한류붐을 불러 일으킨「겨울연가」(2003) 에는 연인들의 사랑의 상징으로서 북극성 (포라리스) 가 그려져 있다. 이 별은 하늘 저 멀리서 계절이 바뀌도 움직이지 않고, 어둠속에서 길을 잃었을 때, 인생의 방향을 비춰주는 존재로서 한국인에게는 이상적인 별이다.「겨울연가」이외에도,「초대」(1999),「당신은 별」(2004-2005),「시티홀」(2009),「상어－사랑의 묵시록」(2013) 등 많은 드라마에 북극성이 나온다. 하지만 모두가 하나같이 인생의 방향을 이끌어 주는「길잡이 별」로서 그려져 있다. 지상의 불빛이 사라진 3 월 11 일 밤, 재해를 입은 사람들의 마음을 움직인 만천의 별이나 별똥별과는 전혀 다르다.

현대 사회는 시간과 일에 쫓겨 마음의 여유도 없고, 네온사인등으로 별이 보기 어려워진 탓도 있고 해서 인지 별을 의식하지 않고 지내는 사람이 많다. 일본사람들도 예외는 아니다. 그런 일본인에게「겨울연가」에 그려진 북극성의 존재는 강렬한 인상을 남겼다. 이처럼 일본인과 한국인의 별에 대한 생각이 다른 것은 왜일까.

본고에서는 동일본대지신 때 밤하늘을 뒤덮은 만천의 별과 별똥별, 그리고 한류드라마를 중심으로 일본인과 한국인의 별에 대한 생각을 비교 분석하여, 왜 한국인이 북극성을 좋아하고 드라마에서 자주 다루는지, 그 역사적 문화적 배경을 밝혔다.

(2020 年 6 月 1 日受理)